

高松市指定史跡

石ヶ鼻古墳

御厩天神社古墳

2009年3月

高 松 市 教 育 委 員 会

徳島文理大学文学部文化財学科

例　言

1. 本書は、徳島文理大学文学部文化財学科が、高松市教育委員会および国分寺町教育委員会（2006年に高松市と合併）の協力のもとに、2000年度（平成12年度）に実施した石ヶ鼻古墳（市史跡：国分寺町福家）と御厩天神社古墳（御厩町）の測量調査報告である。徳島文理大学は学生の考古学実習の一環として、高松市教委と国分寺町教委は史跡および重要遺跡の保存に必要なデータを収集することを目的としている。今回、高松市文化財調査報告として成果を刊行し、公開活用に努めるものである。

2. 石ヶ鼻古墳の測量調査は2000年7月9日～7月20日の12日間、以下のメンバーで実施した。（所属・学年はいずれも2000年度）

文学部講師	大久保徹也
大学院地域文化専攻	1年 大野宏和 川部浩司
文学部コミュニケーション学科	4年 増田ゆず
文化財学科	3年 沖田正大 加納裕之 四方大輔 白木亨 堤徹也
	水野直喜 矢野雅子 山田栄作 渡辺美幸
	2年 杉山大普 奏 爰子 林田真典 藤沢たすく
	水田貴士 溝淵寿美礼

3. 御厩天神社古墳の測量調査は2000年12月21日～27日の7日間、以下のメンバーで実施した。（所属・学年はいずれも2000年度）

文学部講師	大久保徹也
大学院地域文化専攻	1年 大野宏和 川部浩司
文学部コミュニケーション学科	4年 増田ゆず
文化財学科	3年 沖田正大 加納裕之 白木亨 矢野雅子
	2年 杉山大普 林田真典 藤沢たすく 水田貴士
	吉川紘史
1年 岩垣命	岡田奈美 國木裕美 橋本優子
	板東真理子 福島悟史 藤田浩司 松井優也
馬淵哲晃	宮地舞子

4. 石ヶ鼻古墳・御厩天神社古墳の測量成果の概要は2005年（平成17年）3月に『徳島文理大学文化財学科2004年度古墳測量調査報告』付載として概要を報告しているが、今回、末報告の測量図・出土遺物実測図を新たに加えている。

5. 本書に収録した測量図の原図は、調査に参加した徳島文理大学学生が作成した。また、石ヶ鼻古墳石室実測図の浄書は、文学部教授大久保徹也と大学院生中島美佳が担当した。

6. 本書の執筆は、第2章3節を中島、同4節を大久保・中島、他は大久保が担当した。

7. 測量調査にあたっては両古墳の地権者及び地元関係者に様々なご配慮をいただいた。記して感謝したい。

目 次

本 文

第1章 測量調査と報告の経緯 1P

第2章 石ヶ鼻古墳の測量調査

- | | |
|----------------------|-----|
| 1) 立地と現状 | 2P |
| 2) 墳丘測量の所見 | 2P |
| 3) 横穴式石室の形態と構造 | 5P |
| 4) 石ヶ鼻古墳の築造年代 | 7P |
| 5) 石ヶ鼻古墳の評価 | 10P |

第3章 御厩天神社古墳の測量調査

- | | |
|---------------------|-----|
| 1) 立地と現状 | 12P |
| 2) 測量調査の所見 | 12P |
| 3) 既往の出土遺物 | 16P |
| 4) 御厩天神社古墳の評価 | 16P |

写真図版

石ヶ鼻古墳 18P

御厩天神社古墳 20P

挿 図

- | | |
|---|-----|
| 第1図 石ヶ鼻古墳・御厩天神社古墳の位置(1/50,000) | 1P |
| 第2図 石ヶ鼻古墳と周辺地形(1/200) | 3P |
| 第3図 石ヶ鼻古墳の墳丘(1/100) | 4P |
| 第4図 石ヶ鼻古墳の横穴式石室(1/60) | 6P |
| 第5図 讃岐地域横穴式石室玄室面積グラフ
(TK43～TK209 式併行期) | 10P |
| 第6図 石ヶ鼻古墳の系譜 | 11P |
| 第7図 御厩天神社古墳と周辺地形 (1/600) | 13P |
| 第8図 御厩天神社古墳の墳丘(1/500) | 14P |
| 第9図 御厩天神社古墳復元想定図(1/500) | 15P |
| 第10図 御厩天神社古墳出土埴輪(1/3) | 16P |
| 第11図 讃岐地域主要古墳編年表 | 17P |

第1章 測量調査と報告の経緯

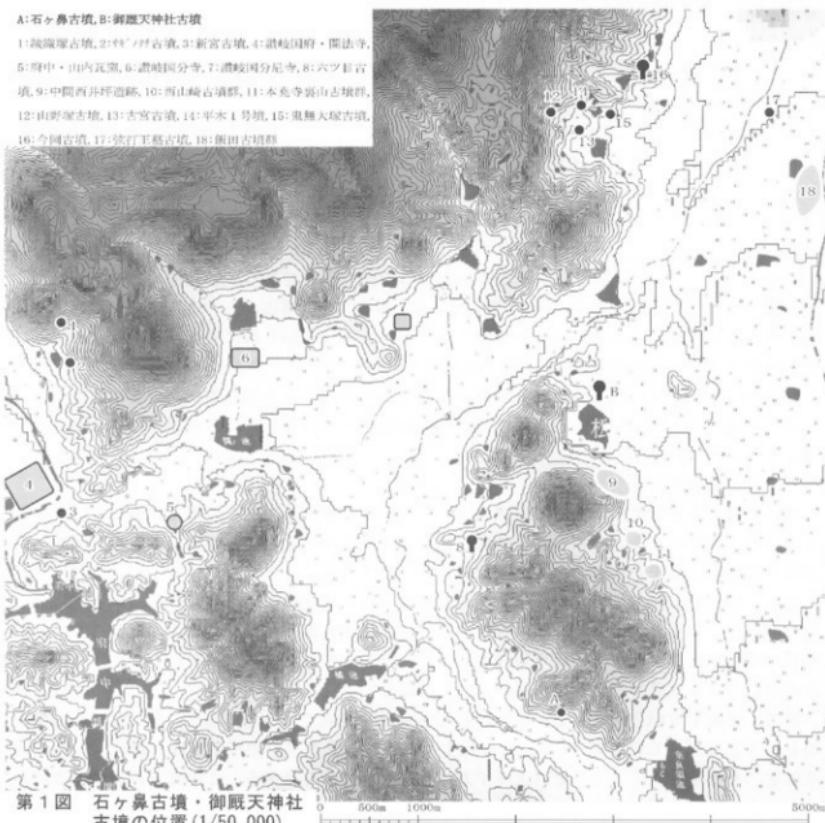
例言に記したように、石ヶ鼻古墳・御厩天神社古墳の測量調査は 2000 年度に徳島文理大学文学部文化財学科の課外活動の一環として、文学部講師大久保（当時）を現地責任者として、大学院生・文学部学生有志の参加を得て実施したものである。調査機材は文化財学科備品を利用し、また測量調査の趣旨から消耗品類の調達などは文化財学科実験実習費の補助を得た。

2000 年 8 月に実施した石ヶ鼻古墳の測量は、当時の大学院生、川部浩司・大野宏和両君の提案により実施の運びとなった。石室部分の測量は主に両君とコミュニケーション学科増田ゆづさん的手になるもので、他の学部生は測量実習を兼ねて墳丘測量等に携わった。同年 12 月の御厩天神社古墳の測量も学生諸氏の努力で実現し、厳寒期に家屋の建て込んだ周辺測量に苦労しつつ作業を行った。調査後、測量図面の校訂等基礎作業も上記した大学院生を中心に学生諸氏が進めた。

そうした学生諸氏の成果を大久保が現大学院生、中嶋美佳さんの援助を得て 2005 年に概要を示し、今回、さらに高松市埋蔵文化財調査報告の一冊として報告するに至った次第である。

A:石ヶ鼻古墳, B:御厩天神社古墳

- 1:鏡山古墳, 2:竹ノ井古墳, 3:新宮古墳, 4:瀬岐國府・開法寺,
- 5:府中・山内瓦窯, 6:瀬岐國分寺, 7:瀬岐國分尼寺, 8:六ツ井古墳,
- 9:中間西井坪遺跡, 10:西山崎古墳群, 11:本免寺裏山古墳群,
- 12:山野屋古墳, 13:吉宮古墳, 14:半木ノ另墳, 15:東無大塚古墳,
- 16:今岡古墳, 17:行玉熊古墳, 18:飯田古墳群



第1図 石ヶ鼻古墳・御厩天神社古墳の位置(1/50,000)

第2章 石ヶ鼻古墳の測量調査

1) 石ヶ鼻古墳の立地と現状

石ヶ鼻古墳は本津川の上流域に面した旧国分寺町南部の福家地区に所在する。滝宮台地東部を開析して流下する本津川は、堂山山塊の南方で緩く湾曲して鷺の山と堂山の間を通り北上する。さらに、堂山山塊の北端、伽藍山の裾を回り込むように北方の五色台山塊との間の地峡部を抜け、下流では五色台山塊の東麓に沿って北流し瀬戸内海に注ぐ。北部の新居地区を含め本津川上流域は周囲を上述の山丘に囲まれ、河川に沿っておよそT字形に谷底平地が展開する盆地状の地勢を呈する。福家地区はこの南端に位置する。

古代において本津川流域は二つの郡に区分されている。概ね主要河川流域ごとに郡域を設定する傾向の強い讃岐国ではやや特異な区分のように見える。本津川下流域および支流の古川流域は令制香川郡の笠居郷・中間郷に所属し、福家地区を含めた上流域は阿野郡新居郷に属すると見られる。阿野郡および香川郡の立郡ないしは分郡の時期は定かではないが、綾川下流域平野の最奥部（阿野郡甲智郷）に国府が位置し、新居郷は綾坂を介して隣り合う位置関係にあることと関係するかもしれない。奈良時代には新居郷北部の五色台麓部に讃岐国分寺・同国分尼寺が建立されている。

本津川下流域の五色台東裾には、後述するように石ヶ鼻古墳と深く関わる神高古墳群が所在し、その間は直線距離で約6km、両者は本津川を介して連絡できる位置関係にある。

また鷺ノ山山塊を越えた西方、綾川中流域にはほぼ同時期の新宮古墳、綾織塚古墳等が分布し、前者との直線距離は約5.5kmを測る。

堂山（標高約302m）の南に続く山塊（標高172.7m）の南麓に位置する。本津川に向かって開く浅い谷地形の西側斜面の中腹にあり、周囲の標高は58m前後で谷央部より10mほど高い。石室は南東方向に開口するが、これは谷出口を向くものである。谷前面の本津川沿いの平地面との比高は約25m、直線距離で200mほどを測る。古墳周辺からの眺望は南に開け、国分寺盆地南端の平地部から滝宮台地を見渡すことができる。しかし西に張り出した背面の尾根に遮られ盆地中・北部を望むことはできない。

1960年代頃までは周辺に10数基の横穴式石室墳が存在したとされるが、現在確認できるものは、本墳と南東約300mの山腹に造成された団地の一角に大破しつつ残存する石ヶ鼻2号墳のみに基にすぎない。

2) 墳丘測量の所見

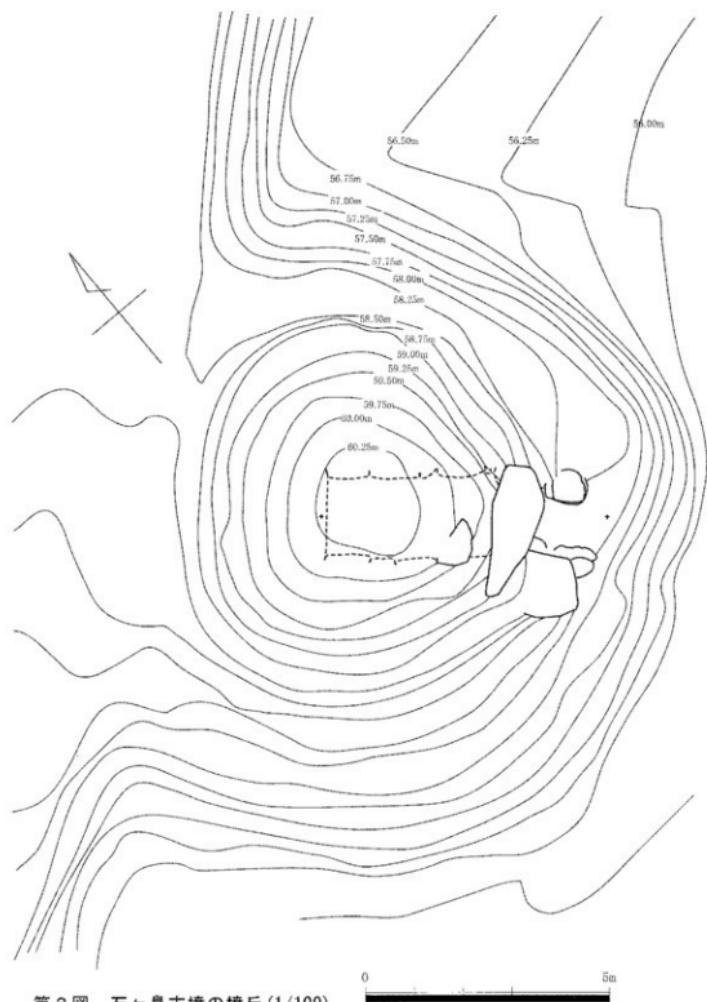
現在、墳丘周辺は果樹園などの造成により相当の改変を被っている。墳丘背面は農道を挟んで比較的山腹の旧状をとどめるが、前面は谷中央部に向かい大きく段状に造成され、墳丘の前面及び両側面は若干の余白をおいて崖状に切り立っている。

本来、墳丘は山腹斜面の緩い凸部を利用して築かれ、墳丘前面側も同様の斜面が谷底に向かって続いているものと考えられる。現在、墳丘背面に接し山腹に沿って農道が延びるが、この部分は墳丘を後背斜面から切断する溝が巡っていたかもしれない。地形からそのように推測できるが、そうした形跡を現状で確認することは難しい。

現在、斜面下方から仰ぎ見ると墳丘はあたかも二段築成であるかのように見える。背面農道のレベルとほぼ等しい標高58m付近に幅1m内外の帯状の平坦地が石室開口部に向かって取り付き、背面を除く三方ではそれより下方は急勾配の崖状を呈する。この部分は農地造成時の改変によるものと見られ、帯状平坦地を含めて古墳の本来的な形状を示すものではなかろう。



第2図 石ヶ鼻古墳と周辺地形(1/200)



第3図 石ヶ鼻古墳の墳丘(1/100)

また現状の墳丘上半部は図示したようにかなり整った半球形を呈しているが、背面農道からの比高は約2mと石室規模の割に低く、現状では玄室天井石上部の被覆土はせいぜい30cm内外しか見込めない。相当量の盛土の流出を想定しておくべきだろうし、そうであれば均整のとれた現形は二次的な整形の可能性を考慮すべきだと考えられる。ゆえに残念ながら本来的な墳丘形態と規模を推測することは難しい。ただ農道が本来的な墳丘背面の凹部(周溝)位置を反

映し、また石室前面の崖面に石材が露出していないことから現状よりさほど石室前面が延びないと推測してよければ、農道一前面崖面の距離が墳丘規模を推測するわずかな手がかりとなる。この数値は約 14m となるが、これはあくまでも墳丘規模の最小推測値にすぎない。また墳丘高の復元はより困難であるが、常識的に考え玄室天井石の上部に少なくも 1m 内外の盛土を見積もり、さらに次項で述べるように玄室に数十cm程度の流入土を想定してよければ、墳丘裾（石室開口部付近）の標高は 57m 前後、墳丘高は 3.5m 程度というところであろうか。いずれにせよ一つの参考値にすぎないものである。

3) 横穴式石室の形態と構造

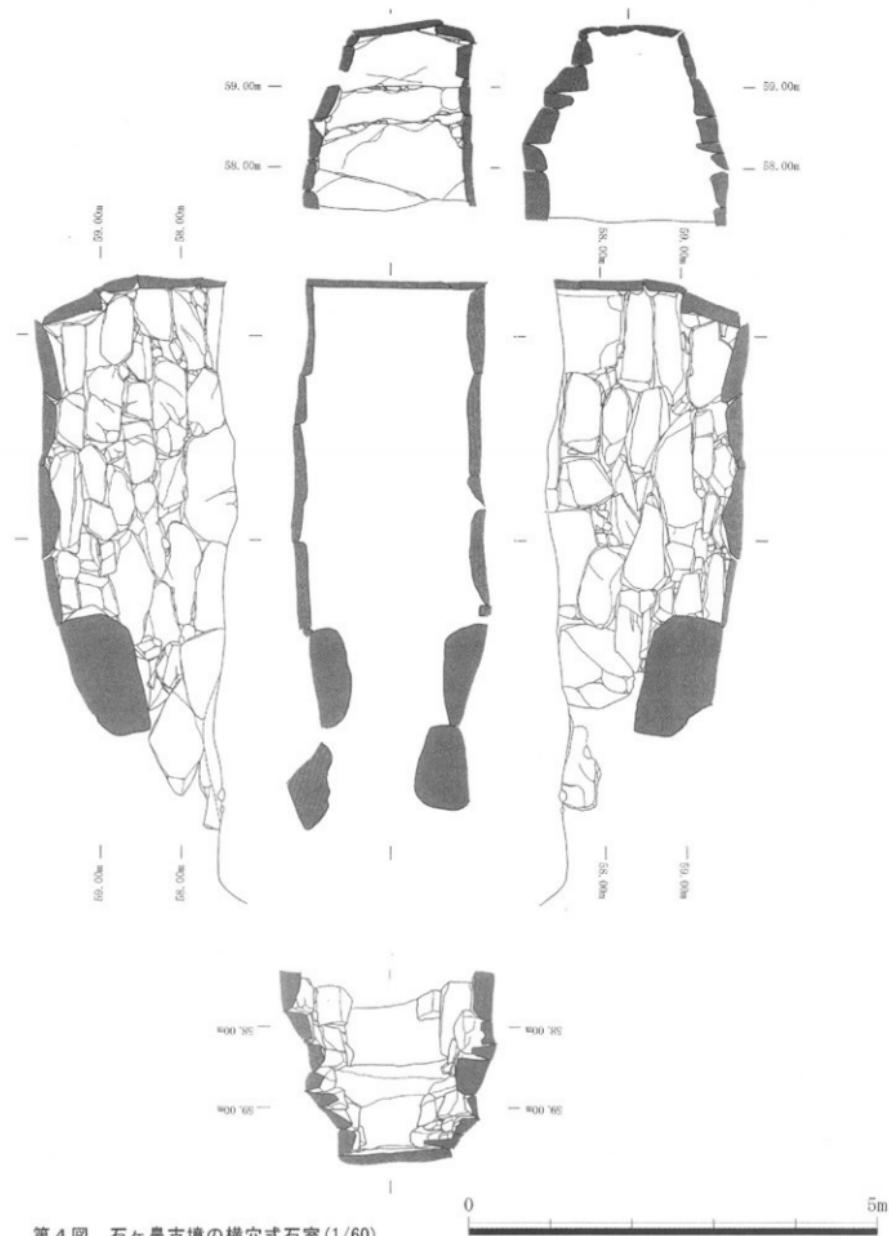
南東に開口する横穴式石室を内蔵する。現在、開口部から土砂が流入し、石室下部は相当程度埋没しているものと見られる。玄門部を含め玄室については天井石まで石積みが保たれている。羨道は現状では玄門から左右 1 石ずつ続き、右側壁では 2 段、左側壁で 1 段の石積みを確認することができるものの、この部分の天井石は現存しない。また現在露呈している羨道側壁材は両側ともにやや向かって左方向にずれているように見える。とくに玄門部右側壁では一部石材の脱落やずれが認められることから、現存羨道部の石組みには二次的な歪みが加わっているかもしれない。

現状で石室の全長は約 6.4m を測る。玄室の長さは 4.2m、幅は奥壁付近が最も狭く 1.9m、最大幅は玄門付近の 2.0m と前面に向かってやや開き、玄室平面は長幅比 2:1 の長方形を呈する。玄室部分の床面積は現状計測値で約 8 m² となる。玄門部は両袖型となる。石室下半の埋没を考慮しても左右袖部の張りは弱く玄門幅 1.3m に対して左右袖部の幅は各々 0.4m 程度にすぎない。このような袖形態は次項で述べるように本石室の重要な特徴の一つである。

羨道は現状で天井石 1 石分長さ 1.4m を測るにすぎない。前項で述べたように墳丘周辺は相当の変更を被っていると見られるので必ずしも現状が本来の形態をとどめているとは言い難い。もっとも墳丘前面の崖部に石材の露出も観察されず、羨道前面があと側壁材 1・2 石分程度伸びたとしても玄室よりかなり短いものとなろう。羨道幅は現状で 1.2m、ほぼ玄門幅のまま伸び、突出玄門の形態とはならない。

玄室の現状高は約 2 m で、玄門部では高さ 1 m を測るにすぎない。開口部から相当量の土砂が流入しており、玄室奥部付近でも側壁最下段とみられる石材は 10 cm 程度しか露出していない。また、讃岐地域で同程度の規模の横穴式石室では、通常、玄門高は 1.5m ~ 2.0m 程度となる。その点から見ても 0.5 ~ 1 m 程度の流入上の堆積を見込んでおくべきだろう。

奥壁は現状では 3 段の石積みを観察できる。主要材はいずれも奥壁幅に相当するサイズの大形石材を用いる。最下段石は現状で 1.1m 程露出しているが、すでに述べたように玄室内は少なくとも 0.5m は埋没していると見られる。したがって、この石材が基底石であれば幅 1.9m、少なくとも高さ 1.6m 以上の大形石材ということになる。左右両側壁面でも基底に大形の石材を据えるが、現状の奥壁第一段石材を基底石と見なしてよければ、ほとんどそれらに倍する、壁面構成石材としてはひとときわ大形ということになる。もちろんこの石材が第二段石材である可能性も否定できないので可能性の一つを提示したにすぎない。さて現状の第二・第三段奥壁材は各々高さ 0.5m、0.7m と、最下段石材に比べかなり小型のものとなる。第二段石材まではほぼ垂直に積むが、側壁石材にもたれかかるように最上段石材をかなり前方にせり出して据える。石材間には掌大の花崗岩削石を緻密に充当しており、とくに奥壁面ではその残りがよい。



第4図 石ヶ鼻古墳の横穴式石室(1/60)

玄室右側壁の最下段は長辺1～1.4m程の4石で構成されている。これらは現状で0.2～0.6mほど露出しているが、これを基底石と見なし流入上分を考慮すると1m前後ないしはそれ以上の高さとなるだろう。二段目以上石材の2～3倍程度の大形石材を基底に据えている可能性が高い。全体で5～6段積みと推測されるが、全体として横方向の目地がよく通るが、二段目以上の石材サイズはばらつきが少なくない。

左側壁の最下段も長辺1～1.4mの大形石材3石で構成されている。全体は4～5段積みで、二段目以上の石材は右側壁に比べやや大きいが、石組みはやや粗雑で右側壁ほどに目地の通りはよくない。こうした左右壁面石積みの相違は積極的に差異を演出する意図であるのか、左右の均衡にとくに拘らないという消極的理由によるものかは定かではないが、本地域の横穴式石室ではしばしば観察される現象である。

また、左右ともに下部の2段ほどは垂直に積み、第三段以上では比較的明瞭な持ち送りを観察できる。現状ではとくに奥部で右側壁のせり出しが著しく、この場合も左右で相違する。ただし、これは土圧等による二次的な変形も考慮しておくべきだろう。

玄室天井は4石をほぼ水平に並べて架構成する。玄門天井には厚みのある大形石材を架け、玄室天井の最前列石端部はこの上に重ね架ける形をとる。この玄門部天井石は単独で玄室前壁を形づくりことになり、前壁高は0.9mを測る。

下半が埋没し不確かではあるが、床面の埋没程度なども勘案すれば、玄門部の側壁は2段で構成されるものと推測できる。下段石材は長辺を縦にして据えるようで、玄門立柱を志向することは間違いないだろう。ただし柱状の石材をとくに用意しているわけではない。また、観音寺市梅賀塚古墳や、近在では坂出市新宮古墳などに見る整った玄門立柱構造の場合、比較的幅の狭い枕状の石材で天井を構成し、左右の柱状立石でそれを支持する形となる。しかし石ヶ鼻古墳の場合、この部分の天井に幅の広い大形石材を採用した結果、玄室最前列から渾道最奥部までの側壁材でこれを支持する形になっており、その点でも、立柱を指向した側壁材を採用しつつも本来的な玄門立柱構造を作り出すことができていない。

渾道天井石は玄門部と共有する1石しか現存しないが、他例を参照すればあと1・2石程度の架構を推測しておくべきだと考える。『国分寺町誌』では本墳の石室について「渾道側壁は玄門天井石より上位にまで積み上げられており、渾道天井石は玄門天井石より位置が高く、いわゆる櫛構造を採用していたとみられる」と記述する。現状では残存する渾道右側壁の上端が、玄門部からせり出す天井石下面よりわずかに高いように見えなくもない。しかしその差はごく微妙でありすでに述べたようにこの部分の石組みは二次的に歪んでいる可能性がある。したがって積極的に櫛構造を復元することは難しいであろう。

4) 石ヶ鼻古墳の築造年代

石ヶ鼻古墳の出土遺物は全く知られていないので、石室形態・構造上の特徴を他例と対比することで本墳の築造時期を推測してみることにする。

前項で述べたように、石室下半は埋没しており必ずしも形態の詳細を知り得ないが、多少の推測も交えて特徴をまとめると以下のようになる。

- ①玄室平面形は長幅比2:1の長方形を呈する。
- ②玄室に比べかなり短い渾道を付す可能性が高い。

- ③玄門構造は羨道幅より突出しない両袖式を呈し、袖石の張り出しが弱い。
- ④玄門側面に立柱状の石を配するが、その上部に積んだ石材を介して天井石を支持する。
- ⑤奥壁は3段構成となる可能性が高い。
- ⑥玄室三壁の基底には第二段以上に比べ大型の石材を配する。とくに奥壁でその度合いが強い。
- ⑦さほど顕著ではないが玄室側壁では持ち送りが観察できる。
- ⑧玄室天井は4石を水平に構架する。
- ⑨玄室最前列天井石は玄門天井石に重ね架け、玄室前壁は玄門天井石一段で構成する。
- ⑩玄門から羨道の天井は水平に連続しいわゆる樞構造になる可能性は低い。

石ヶ鼻古墳の周辺では、神高古墳群の一部に類似した特徴を見出すことができる。神高古墳群は高松平野西縁の五色台山麓に位置する有力な古墳群で、石ヶ鼻古墳とは本津川を介して関係する。神高古墳群は10基以上の横穴式石室墳で構成されるが、そのうち山野塚古墳・古宮古墳・鬼無大塚古墳・平木1号墳の4基がとくに規模が大きい。これらを含め川畑聴は石室形態と石組みの特徴および立地から神高古墳群を3グループに分けた。神高池奥の谷筋に位置する山野塚・古宮古墳のグループ、一つ尾根を越えて北側の谷筋奥にある平木1~4号墳のグループ、そして同じ谷のやや下方に離れる鬼無大塚古墳のグループである。ただし報文中で川畑も指摘するように、立地の点をひとまず捨象すれば第二・第三のグループは石室形態・構造の面で共通点が多く、ここでの主題に則せばむしろ山野塚・古宮グループと平木・鬼無大塚グループに分けておいた方がよい。平木・鬼無大塚グループは明確な玄門立柱構造を採用し石積みの点でも山野塚・古宮グループとは相違する。平面形態に一定の変容はあるが、新宮古墳の石室形態から派生するものと位置づけたい。この点については後節で少し触ることにしたい。

さて石ヶ鼻古墳の築造時期を考えるにあたって参考になるのは山野塚・古宮古墳グループの方である。山野塚古墳は長5.4m、幅1.8~2mとかなり細長い玄室に、現状では2.4m程の短い羨道が取り付く。石室前面がどの程度遺存しているか判断としないが、側壁石積みの様態からせいぜい天井1石分程度の長さが加わる程度と推測できる。一様玄門部は向袖形態をとるが左右ともに袖部の張り出しが弱い。奥壁は5段構成で第一段にとくに大形の石材を据える。左右側壁もおよそ5段構成で、各々第一段に比較的大型の石材を用いるが、第二段以上との差は奥壁ほど顕著ではない。玄室天井は4石をやや前傾気味に並べ、前壁は二段構成で、玄室最前列天井石は前壁上段に重ね架ける。玄門左右の側面にはおよそ玄室側壁材3段ほどの高さの石材を据え、その上に載せた一石を介して玄門天井石を支持する。立柱構造を志向する形態だが使用石材の形状はあまり整わず、また先に述べたように内方に突き出すこともない。羨道天井石は現状では1石を残すのみ。側壁の石積み様態から推測してさらに1石の架構を想定してもよいが、積極的な材料はない。羨道天井石の端を玄門天井石に重ね架けるように置き、そのため微妙な段差が作り出されているが、使用石材の形状もあって明確なものではない。

以上、細かく山野塚古墳の石室形態を説明してきたが、玄室平面形の長さは別として石ヶ鼻古墳に通じる点は少なくない。続けて古宮古墳の石室形態を確認した上で、石ヶ鼻古墳との関係を検討することにしよう。古宮古墳の玄室は長さ5.9m、幅2mで山野塚古墳よりわずかに長いが狭長な平面形はよく似ている。やはり形骸的な両袖型で左右袖の張り出しが同様に弱い。奥壁は二段構成で第一段石材も大形化するが、それ以上に山野塚古墳では小型石材4段で構成していた奥壁上部を一石化した変化が大きい。両側壁の使用材もやや大形化し左右とも概ね4段構成となるが、さほど第一段石材が大形化するようではない。玄室天井は4石で構成

するが、使用石材の形状もあって間隙が少なくない。とくに最前列石は歪な自然石のせいで玄門部に向けて斜め架けするかのように見える。玄門部に架構した1石で前壁を構成する。玄門側面には他よりも大形の石材を用いるがとくに柱状を呈するわけではない。玄門天井石に底面幅の広い石材を使用していることもあり、玄門から羨道奥部の側壁材でこれを支持する形になり、玄門立柱構造を志向していたとしても山野塚古墳以上にその形態は崩れている。現在前面に落下している石材の存在から少なくとも玄門部の前方にあと1石天井が架かっていたことは間違いないだろう。羨道側壁の石積み様態から推測して玄門天井から水平に連続するか、あるいは山野塚古墳のように微妙な段差を有したものと復元しておきたい。

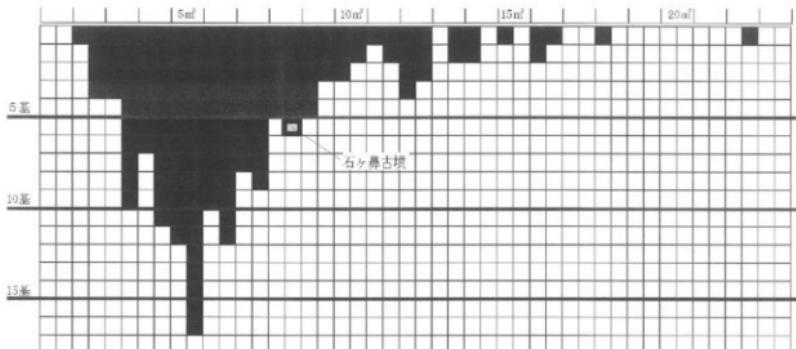
山野塚古墳と古宮古墳の時間的関係であるが、奥壁および前壁段数、そして側壁を含めた全般的な石材大形化傾向から山野塚古墳→古宮古墳と推測しておくことが素直であろう。川畠氏の編年案でもそのような理解を示している。古宮古墳からは一定量の須恵器が出土しており、その上限はTK209式並行期に収まるものと解される。長脚二段三方透かしの有蓋高坏一点が出土しているが、通有のTK43式の有蓋高坏形態との差異が目立つ資料だ。坏部サイズの割には脚部が萎縮していること、また坏蓋（高坏本体と融着している）のボタン状つまみが通有の形態とは異なり軸部分が不自然に間延びする。伴出した無蓋高坏は低脚タイプか無透かし二段タイプばかりで、蓋坏もまた立ち上がり部の矮小化と仕上げ調整の粗雑さが顕著でいずれもTK209式並行期に属すると見られることから、この一点を以て古宮古墳の築造時期をTK43式並行期に遡らせるには無理がある。一方、山野塚古墳から須恵器は出土していないが、先に挙げた形態的特徴から、やはりTK209式併行期の枠内で築造時期を捉えておくべきだと考えられる。すでに述べたように築造時期の差を推測しうる程度の形態・構造上の差異が両古墳にはあるのだが、その間にあまり大きな間隙を見込むほどではない。山野塚古墳の玄室前壁は二段構成とはいえ、上段石はほとんど詰め石程度に小型化しており本来的な前壁多段構成とは趣を違えている。TK209式併行期に位置づけられる新宮古墳でも今少し重厚な前壁多段構成が残存している。また奥壁の構成についても玄室床面積10m²を越える大形石室の場合、TK209式併行期でも3段以上の構成は少なくない。逆に両古墳に通じる弛緩した袖部形態および極度の玄室長退化（と羨道の短縮）はTK43式併行期の石室に類例を求めるものである。したがって山野塚古墳→古宮古墳の築造はTK209式併行期に行われたものと見ておきたい。もっとも古宮古墳出土の有蓋高坏を重視すれば該期前半段階のかなり近接した時間幅の中で両古墳が築造されたものと思われる。

さて、すでに述べてきたように石ヶ鼻古墳の石室形態はさほど玄室平面が長大化していない点を除けば、弛緩した袖部形態、おそらく羨道が短いであろうことや、低い玄室天井高といった点などは山野塚・古宮古墳に近似したものといえる。さらにいえば奥壁の構成は山野塚古墳と古宮古墳の中間的な様相を呈するし、玄室前壁段数の点では古宮古墳と一致する。また玄門部に架構した天井石が平板化し、玄門から羨道の側壁で支持する構造をとる点も古宮古墳に近いといえよう。

こうした点から石ヶ鼻古墳の築造時期を、類似した石室形態の神高古墳群山野塚古墳・古宮古墳を参照して、TK209式並行期前半段階と推定しておきたい。

5) 石ヶ鼻古墳の評価

すでに述べたように石ヶ鼻古墳の玄室床面積は約8m²と復元できる。国分寺盆地に現存する横穴式石室墳では最も規模が大きい。第5図にTK43～TK209式併行期の讃岐地域横穴式石室の玄室床面積グラフを示した。床面積5m²前後の横穴式石室が最も多く、10m²以上の大型石室はほぼ上位12%強ということになる。したがって石ヶ鼻古墳はこの上位クラス横穴式石室に準じた位置づけといえよう。



第5図 讚岐地域横穴式石室玄室面積グラフ (TK43～TK209 式併行期)

本津川下流域の神高古墳群のうち、主要な山野塚古墳、古宮古墳、鬼無大塚古墳、平木1号墳は各々11.6m²、12.2m²、11.7m²、9.4m²とほとんどが上位クラスに包含される規模をもつ。また鶯ノ山山塊を挟んだ西方、綾川下流域では醍醐3号墳、新宮古墳、綾織塚古墳など数基が上位クラスに位置づけられ、石ヶ鼻古墳に同クラスの横穴式石室墳としては仏願古墳などが知られる。

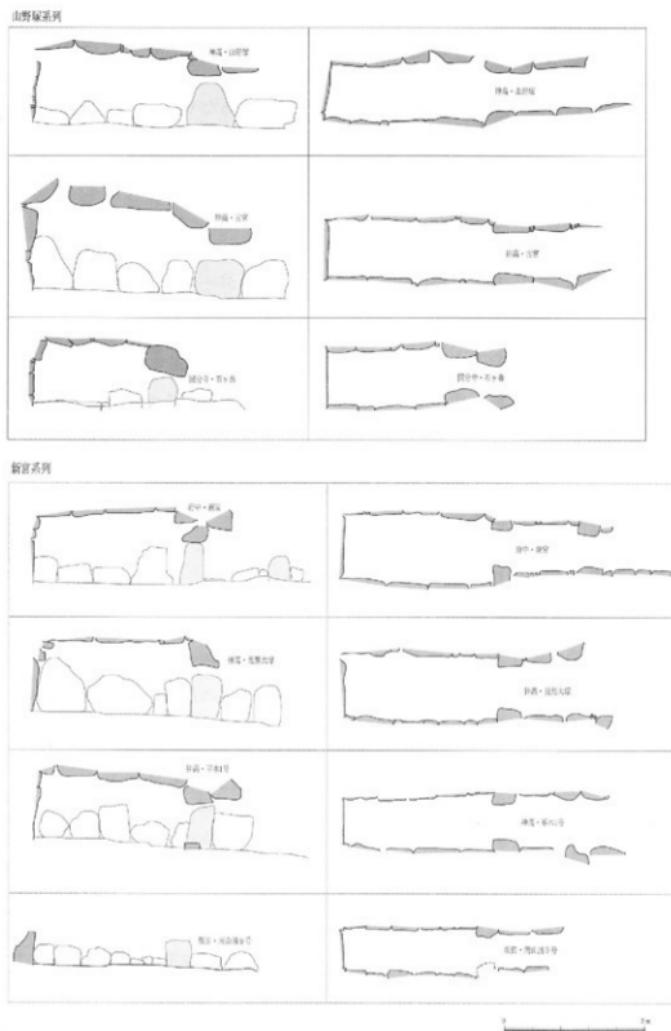
もう少し広く見渡しても、今述べた上位クラス諸墳はその分布から令制郡程度の領域で盟主的な位置にあるといえそうだ。ただ前節の検討からも示唆されるようにそうした盟主墳クラスがかかる領域毎に一代一墳的に築造されているのではなさそうな点は注意を要する。石ヶ鼻古墳クラスは上位クラスの築造基盤に包摂される複数の下位小領域を基盤とするととりあえず想定しておきたい。

最後に、石ヶ鼻古墳横穴式石室の系譜的な位置づけについて簡単に触れておく。国分寺盆地を含めた本津川流域とその周辺地域における横穴式石室の大型化は、今のところTK209式併行期に開始されるようだ。これはTK43式併行期に母神山鐘子塚古墳の築造を以ていち早く大型化を開始する三豊地域より一段階遅れそうだ。

綾川流域では新宮古墳が大型石室の嚆矢と見られるが、その構造は觀音寺市梶賀塚古墳石室を一定改変したものと推測できる。以後新宮古墳のモデルとした醍醐3号墳や綾織塚古墳などの築造が続く。一方、本津川下流域では山野塚古墳から大型化が始まるが、山野塚古墳・古宮古墳の2基は新宮古墳あるいはそのモデルとなる梶賀塚古墳の構造とはかなり異なり、今直ちにその祖形を提示する用意はないがとりあえず別系譜と見ておきたい。ただし鬼無大塚古墳・平木1号墳はあきらかに新宮古墳に由来する形態・構造と位置づけられる。また石清尾山南麓

の南山浦古墳群にもそれと同系統の9号墳が登場する。本津川下流域周辺では大型化の初期に一旦、別系統の石室形態を採用するものの短期間で終息し、TK209式併行期のうちに新宮系統石室に塗り替えられてゆく流れを想定しておきたい。

石ヶ鼻古墳石室は山野塚古墳・古宮古墳に近似し、このエリアの石室大型化初期段階の非新宮系統石室の一つということになろう。



第6図 石ヶ鼻古墳の系譜

第3章 御厩天神社古墳の測量調査

1) 立地と現状

御厩天神社古墳は高松平野南西部に所在する。堂山山塊北端に位置する伽藍山の東裾にあって、現御厩池の北面堤防にほど近い地点である。このあたりの山麓緩斜面は比較的開析が進み、その残部高台がおおよそ北東方向に向かって手指状に並ぶ。御厩天神社古墳はそうした地形の一つ、その先端部の標高 30m ほどに位置する。国分寺盆地を流下してきた本津川と堂山山塊東麓を通る古川は、本古墳の北方で合流し、五色台東裾に沿うように北流し瀬戸内海に注ぐ。埴輪製作拠点であり、小形前方後円墳を含む前期後半および中期半ばの古墳群が確認された中間西井坪遺跡は、南北方向の六ツ目山山麓に位置する。北方の五色台山塊南東隅にある袋山周辺には衣掛古墳・袋山古墳がかつて所在したとされるがその実否を含め様相は不明である。またやや下った北方の平地面では、本津川右岸に後期段階の飯田古墳群や弦打王墓古墳、御厩大塚古墳が点在する。

さて、御厩天神社古墳は早くから知られた前方後円墳で、寺田貞次氏が昭和 10 年に長さ 17 間の前方後円墳で埴輪を伴うことを報告している。しかしその後、詳細な検討を加える機会がないまま数十年が経過した。

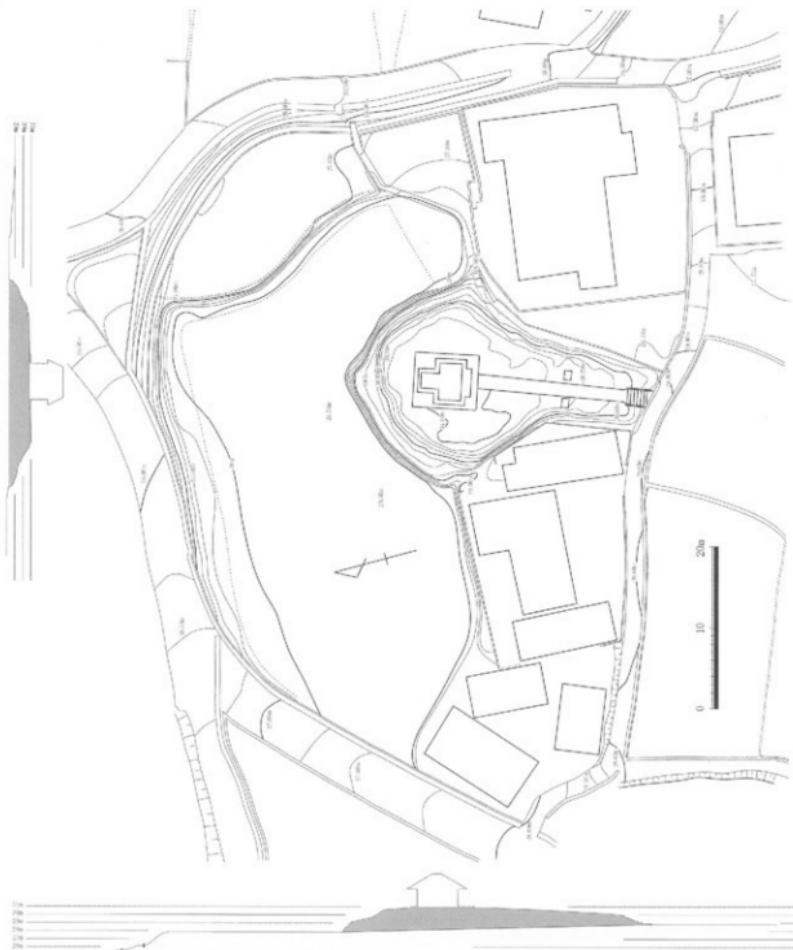
現状では墳裾部を隣接宅地と水田造成でかなり削り込まれ、かつ墳頂に所在する天神社の祠及び参道整備によって上面も削平されている。かろうじて墳丘の旧状をしのばせる部分も残存するが全体に改変の程度は小さくない。

2) 測量調査の所見

本古墳が前方後円形を呈することは、過去の報文や現在の形状から疑いはない。しかし詳細な形態と規模を復元することはたやすくない。一見して明らかのように、宅地と耕地造成によって墳丘裾の大部分を削り込まれている。また墳丘規模に比した平坦面の大きさから見て、墳頂部は祠の設置時にある程度削平されていることを見込む必要がある。それでも可能な限り旧状をとどめると思われる部分を参考に規模・形態の復元を試みておく。

後円部墳丘の北西側には帯状に取り付くかなりはっきりとした平坦部を観察することができる。現状の斜面中位（標高 29.5m 付近）にあたり、幅は 1 m 内外とあまり広くない平坦面である。（写真 22・26）。位置と形状から本来の墳丘中位段である可能性が高い。現状では後円部北西の 1 / 4 ほどにこの平坦面は連続するが東半部には及ばない。この部分を含めて墳丘を削り込んでいると見られる。また明らかに宅地が墳丘に切り込んでいくるびれ部寄り部分の東西面にも残らない。前方部側にこうした平坦面が連続する形跡は見出しがたく、ただちに判断することは難しい。とりあえずは後円丘が二段築成の可能性が高いことを確認しておこう。

さて中位平坦面が連続して残っている後円部北西面では平坦面の内縁すなわち墳丘第二段斜面裾のラインはほとんど正円に近い整った円弧を呈している（A-A'）。また平坦部外縁ライン（B-B'）は内縁ラインと並行し、墳丘第一段上縁相当部分が残存するか、少なくもその形状を反映するものと考えられる。そしてこの部分では第二段斜面に相当する箇所の勾配にも不自然さがなくまた形状に乱れない。後円部上面は削平されているとはいえこの部分は比較的原形をとどめているものと推測できる。以上を出発点にして後円部墳丘の復元を試みておこう。



第7図 御厩天神社古墳と周辺地形(1/600)

後円部北半については周辺地形の点からもおおよそ標高 28~28.25m付近を墳裾高と見ておいてよいだろう。ただし中位テラスがよく残る北西面でも墳丘斜面の下段(B-B'外方)は不自然に切り立っているおり、明らかに水田等の造成時に削り込まれていることがわかる。当然、現状の斜面下端をそのまま墳丘裾とすることはできない。確たる証拠とはなりにくいがとりあえず現状で裾が最も張り出した地点北端(C-C'中央部)および、素直な斜面勾配を示す東面の一部で読み取れる傾斜変換点(D-D'中央部)を参照して考えてみよう。前者周辺もやや勾配はきつい

が、B-B'ライン外方のほど切り立ってはいない。後者は東から墳丘に登る小径にあたり、二次的な改変とも考えられるが、斜面勾配の点で不自然さはないし、その前後は水田造成と宅地で削り込まれ、小径部分がかろうじてそれを免れたと解しておきたい。

その上で、まずはA-A'とB-B'の並行する二つの円弧（先に推測した墳丘中位平坦面の内外縁）から後円部中心点を図上で求めてみる。およそ墳頂の祠南面、やや東よりの地点に復元できる。次にこれを中心に、C-C'中央までの距離を半径とする円を描くと、東面の推定傾斜変換点（D-D'の中央部）と無理なく一致する。やや機械的ではあるがこのラインを墳裾推定ラインとしておきたい。周辺地形は南に緩く下がっており、前方部端と後円部端周辺では0.8～1m程度の比高がある。したがって墳丘下段の斜面長は地盤の下がる後円部北側では多少伸びるであろうことから、実際には後円部北側の墳裾ラインは今少し外寄りに想定すべきかもしれない。なお第二段墳丘高を具体的に復元する

手がかりを欠くが、第二段残部の斜面勾配と通有の墳頂平坦面サイズから類推すれば現状値に1m内外を加えた規模としておくべきか。

以上の検討から推測した後円部後円部墳丘の規模と形状を示しておこう。

後円部径 28m、

第一段墳丘高 1.2～1.5m、

中位平坦面幅 1.2m、

第二段墳丘高不明（現状で 1.5～1.7m 残存）

統いて前方部の規模と形状について検討してみよう。両側を宅地に挟まれ、特にくびれ部相当位置では東西ともに深く削り込まれており、少なくとも墳丘下半は原形をとどめていない。しかし前方部左右の側方斜面は比較的素直な勾配を呈しており、この部分では旧状に近い可能性がある。現状では東面の傾斜変換点が標高 29.5m、西面では標高 29.4m となる。前面は市道で多少削り込まれている恐れもあるが、南西コーナーが比較的整った形状を呈しておりこの部分は大きく損なわれていないと見て、F'-G'ラインを前方部前端の反映位置としておきたい。

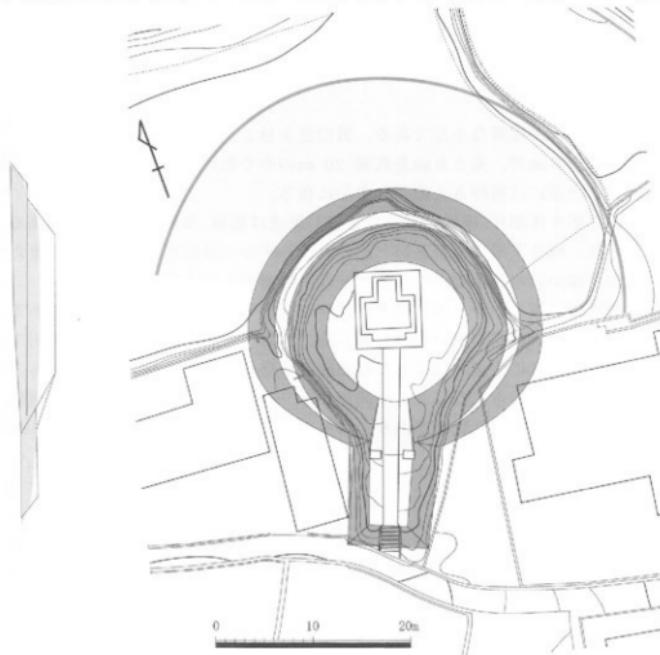


第8図 御厩天神社古墳の墳丘(1/500)

そうすると前方部は先端に向かいやすくなる形状が復元できる。また前方部上面は後円部頂から南に下るなどかななスロープとなる。祠の設置時に墳頂は相当削られていると見られるが、その削平土が敷き均されているものであろう。くびれ部付近で標高 30.8m、南端で 30m を

かる。

先に後円部は二段築成で中位 29 ~ 29.2m 付近に平坦面が取り付くことを想定した。前方部上面は最も下がる南端部分でも 1 m 近く高くなるので、この平坦面が前方部上面に連続することは想定しにくい。また前方部南側の周辺地盤は標高 28.7 ~ 29 m で、後円部中位平坦面の高さとほとんど異ならない。



第9図 御厩天神社古墳復元想定図(1/500)

こうした点から地盤が下がる後円部側では中位に平坦面を設け墳丘を二段構成とするが、これは前方部には連続していかないものと考えられる。

以上から、前方部は前面幅 7.8m、中位幅 9.6m、高さ 1.5 ~ 1.7m で、後円部形状と規模の復元に基づいてその長さは 10m と推測する。

後円部の北東外方に後円丘の輪郭と併走する方向の水田畦畔が遺存する。くびれ部方向に延び、墳丘との間は部分的に凹地となる。部分的に観察できるだけだが、これを積極的に評価すれば墳丘に付帯する周濠もしくは外周整地帯の痕跡である可能性を指摘できるだろう。その場合、周濠（整地帯）幅は 13 ~ 14m と復元できる。なお前方部側ではこれに連続するような墳丘付帯部の痕跡を現状では指摘することができない。

以上、推測を交えつつ測量成果に基づいて墳丘各部の形状と規模について述べてきた。御厩天神社古墳は基底部径 28m 2 段築成の円丘に長さ 10m ほどの短い前方部を付したいわゆる帆立貝形前方後円墳である。墳丘長は 38m、後円部側に限って周濠（外周整地帯）を伴うとしても総長は 50m 前後となる。

3) 既往の出土遺物

過去の報文では御廐天神社古墳から須恵器と埴輪の出土を伝える。現在、須恵器については全く情報がない。埴輪はわずかに2点が知られる。1点は戦前に寺田貞次氏が採集した資料で現在、金刀比羅宮学芸参考館に収蔵されている(第10図1)。もう1点は1990年に後円部墳頂で大久保が採集した資料である(第10図2)。

1は突帯部分で体径の復元が困難な小片である。黄白色を呈し焼成は堅緻。体部厚は7~8mmで、高さ8mm基底幅20mmのやや低い台形突帯を付す。外面には突帯付加時の横ナデ、内面には指押さえ痕がかすかに残る。

2は透かし孔の一端を残す体部片。同様に黄白色を呈し焼成は堅緻。体部厚7~8mmを測る。透かし孔は円形と見られ、破片下端に突帯基部と思われるわずかな隆起が見て取れる。また透かし孔に接して斜方向に細かいハケ調整がのこる。他は内外面ともにナデ調整。

いずれも小片のため断定は難しいが、須恵器との共伴を想定しても矛盾のない資料である。焼成具合から類推して川西編年IV式期ないしはそれ以降に位置付け得ると考える。本津川下流域の弦打王墓古墳、同河口左岸の住吉神社古墳では須恵質を呈し、著しく扁平化しどんど形骸的な突帯を付した円筒埴輪が知られる。また中間西井坪3号墳や南方の本庵寺裏山古墳群ではやや突出度の高い台形突帯を付した資料があり、III~IV式に比定できる。本資料はとりあえず両者の間に位置づけることができる。

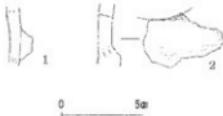
4) 御廐天神社古墳の評価

とりあえず現時点における御廐天神社古墳の評価をまとめておきたい。少量の採集埴輪ではあまり厳密な時期比定は難しい。少し幅を持たせておけば集成編年の6~8期の間に位置づけることとなろう。

また極度に前方部の矮小化した帆立貝形古墳であることを考慮すれば集成編年7~8期に絞り込むべきであろうか。今のところ四国北岸地域では6期以前に遡るこうした墳形は確認できない。

早くに墳丘の大半を破壊されて詳細の不明ではあるが、石清尾山山塊南西端にガメ塚古墳が存在する。本津川流域に面した立地で、前方部の矮小な墳頂25m程度の前方後円墳といわれる。1999年に香川県教育委員会が残部の確認調査を実施し、後円部墳丘盛土の一部を確認している。少なくとも本地域の前期古墳ではあまり発達しない緻密な互層構成の盛土で、上記した墳形を考慮すれば御廐天神社古墳に近い時期の所産である可能性も否定できない。とはいえ埴輪の樹立も知られておらずあまり積極的には評価できない。この他後期前半に位置づけられるであろう本津川右岸の飯田古墳群など墳形に関する精度の高い情報に欠ける一群もあり、全体的な評価は今後の課題であるが、さしあたって現時点では、帆立貝形とはいえ御廐天神社古墳は高松平野および以東の四国北東部エリア全体で最も新しい段階の前方後円墳ということになるだろう。

周知のように高松平野以東では古墳時代前期に比較的小型の前方後円墳が多数築かれる。しかし中期前葉(集成編年5期)の富田茶臼山古墳を以て、一旦、前方後円墳が廃絶する。中期中葉以降は中型の円墳がこのエリアの盟主墳となるが、それ以前に比べ明らかに墳丘規模は縮



第10図 御廐天神社古墳
出土埴輪(1/3)

小し、また相互の較差も乏しいものとなる。富田茶臼山古墳の段階で一度は完成の域に達した
ように見えるローカルな階層的秩序がその直後に解体している觀がある。

この後、四国北岸地域では松山平野から丸亀平野の一角にかけて、後期半ばに一時的に前方後円墳の復活を見、さらに大形横穴式石室墳へと続く。しかし高松平野を含め四国北東部にはこの前方後円墳復活の波は及ばない。中期後半に帆立貝形前方後円墳が広がるエリアと次期の前方後円墳復活エリアはほぼ重複するが、御殿天神社古墳を積極的に評価すれば高松平野は例外的エリアということになろう。

上に述べた本津川流域の飯田古墳群や河口部の住吉神社古墳などは御厩天神社古墳に後続する位置にある。中期中～後葉の古墳が乏しい本津川流域に後期にいたって築かれるこうした諸墳の意味を考察する上でも御厩天神社古墳は重要なものとなる。

調岐地域主要古墳編年表

第11図 謙岐地域主要古墳編年表

《参考文献》

川畑聰 2005「神高古墳群について」『神高古墳群—神高池北西古墳—』高松市教育委員会
寺田貞次 1935「讃岐に於ける前方後円墳」『考古学雑誌』25巻5号 考古学会



写真 1 墓丘の現状 南西から



写真 2 墓丘の現状 後背斜面上方（北西）から



写真 3 墓丘の現状 北東から



写真 4 墓丘の現状 南西から



写真 5 墓丘と周辺地形 谷奥（北東）から



写真 6 墓丘測量調査風景



写真 7 測量調査の参加者



写真 8 周辺地形測量風景



写真9 石室正面観

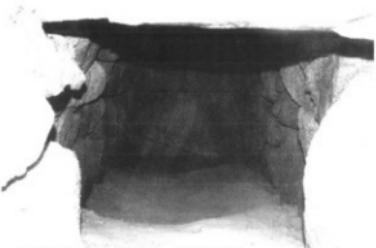


写真10 玄室奥壁 瑞道から



写真11 玄門および側壁 奥壁から



写真12 玄室前壁



写真13 玄室奥壁



写真14 玄室奥壁および側壁上部

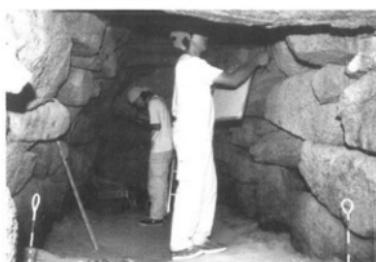


写真15 石室測量風景



写真16 石室測量風景



写真 17 古墳および本津川下流域 御厩池北堤(南)から



写真 18 古墳の立地 万灯山南麓(北西)から



写真 19 墓丘全景 御厩池北堤(南)から



写真 20 後円部墳丘 北から



写真 21 後円部墳丘 北西から



写真 22 後円部墳丘 北東から



写真 23 後円部上面の現状 前方部から



写真 24 前方部上面の現状 後円部から



写真 25 測量調査風景



写真 26 測量調査風景



写真 27 万灯山からみた墳丘および周辺地形



写真 28 測量調査のひととき

報告書抄録

ふりがな	いしがはなこふん みまやてんじんしゃこふん						
書名	石ヶ鼻古墳 御厩天神社古墳						
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第119集						
編著者名	大久保徹也 中島美佳						
編集機関	高松市教育委員会 德島文理大学文学部文化財学科						
所在地	高松市教育委員会 〒760-8571 香川県高松市番町・丁目8番15号 TEL087-839-2660 徳島文理大学 〒769-2193 香川県さぬき市志度 1314番地1 TEL087-894-5111						
発行年月日	西暦 2009年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	しょぎいら 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号				調査原因
いしがはなこふん 石ヶ鼻古墳	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 こくぶんじ 国分寺 ちょうふけ 町福家	37201		34° 16' 22"	133° 58' 44"	2000.7.9 ~ 2000.7.20	1,700 m ²
みまやてんじんしゃ 御厩天神社 こふん 古墳	みまやこう 御厩町	37201		34° 18' 08"	133° 58' 59"	2000.12.21 ~ 2000.12.27	9,450 m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
石ヶ鼻古墳	古墳	古墳時代後期	円墳、横穴式石室				
御厩天神社古墳	古墳	古墳時代中期	前方後円墳	埴輪			
要約	石ヶ鼻古墳は、両袖型の横穴式石室をもつ円墳で、石室の大きさは県内の上位クラスに準じた規模で、国分寺盆地においては現存するものでは最大である。 御厩天神社古墳は、中期後葉頃の帆立貝形前方後円墳で、後円部側に周濠（外周整地帯）をもつ可能性がある。						

石ヶ鼻古墳 御厩天神社古墳

平成 21 年 3 月 31 日

編集・発行 高松市教育委員会
徳島文理大学文学部文化財学科
印 刷 有限会社 中央ファイリング